

# Lib

京都産業大学図書館報

v.26, no.2 (Oct. 1, 1999)

ホームページに掲載中 <http://www.lib.kyoto-su.ac.jp/>



本学所蔵 賀茂葵祭行装ノ図より

## 特集 ミレニアムと世紀末

2000年問題と世紀末 宮野 高明 1

終わりと始め 杉本 明 2

いんぷいおめーしょん 4

### 2000年問題と世紀末

宮野 高明

世紀末とは何だろう？と改めて考えてみると、世紀末とは何とも奇態なものである。それは人間が勝手に作り出したものに過ぎず、世紀末とは全く無関係に宇宙は存在し、地球上の動植物もまた世紀末とは全く無関係に生存している。1つの世紀の中で生まれて世紀末を見ることなく現世を去って行く人達もいて、全ての人が世紀末を体験できるとは限らないが、人間が勝手に設定した世紀末を過ごせたからといっても何の意味もない。何らかの機会がなければ、ついつい時の移り変わりの中で流されてしまうのが人の世の常であるから、現時点で20世紀を振り返り、いろいろな反省と共に今世紀の締め括りをして、来るべき21世紀へ向けての準備をしなければならぬと考えることは無意味ではないと思う。

それにしても、頭の痛い問題の山積した世紀末である。世界が2度の大戦を経験して、人類はそこから何かを本当に学んだのであろうか？戦争の悲惨さや残酷さを話に聞いて知っている程度の世代が口に平和を叫び戦争反対を叫びながら飽食の時代、浪費の時代を過している。その一方では身をもって戦争を体験した世代が、自らの貴重な体験が風化し忘れ去られるのを心配して次の世代にそれを伝えるべく涙ぐましい努力をしてみても昔の話としてしか聞いてもらえないもので、それも自然なことであり風化を伴わない時の移り変わりなど有り得ない。

20世紀はまた、科学・技術の長足の進歩による地球規模での変化を生み出し、科学万能主義の幻影に踊らされた人達も少なくないが、新しいものが世に出現する時には、そのプラスの効用が話題になり勝ちで、少し

遅れてマイナスの効用すなわち反社会的な影響、非人間的な作用、時には犯罪的結果などが問題視されはじめるものである。このようなマイナスの効用による問題の堆積の中で人類が喘いでいるのが今世紀末の現状である。

まさに20世紀は動乱の世紀であったが、世紀末に山積された問題についての対処方法のほとんどが場当たり的であって、根元的な手は打っていないのを見るにつけ、このままで行くと来世紀は混乱の世紀としてはじまり、それがどのようなものか、混乱が良い方向に収束する保証も見えてこない。

世の中のほとんどの事象が、人為的な世紀末というものとは無関係に展開する中であって、Y 2 K (YEAR 2 K I L O) すなわち2000年問題は極めて特殊な問題である。2000年問題は20世紀末ならでは、しかも地球規模での大問題なのである。それもその筈で、20世紀に人間が作り出した道具の中で格別に注目を集めていて、その存在が極めて急速に地球全体の社会基盤に成長したコンピュータと称する人為的産物にかかわる問題なのである。

2000年になると、世界中のコンピュータの多くが異常な動作をしたり停止したりして、多方面にわたって大きな混乱が発生するのではないかと心配されている。

連日のようにマスコミが2000年問題を取りあげていて、具体的にどのような困った状態が想定されるのかについては、これでもかこれでもかと言わんばかりに話が繰返されていて、いささか食傷気味の感じすらある。ここでは、想定される2000年問題のトラブルを列挙することはしないで、見る角度をかえてもっと違っ

た考察をしたいと思う。

2000年問題を無視できないのは、それがノストラダムスの予言やハルマゲドンの話などとは異なり、2000年問題は十分な技術的根拠に基づく予告だからである。予言というものは、それが当れば人々は驚いて騒ぐし、予言をした者は得意になり、それが当らなければ人々は無視するだけの代物である。

2000年問題は必ず生起することが見えている確実な課題なのである。

2000年問題に先だって、本年の8月22日にはGPS (Global Positioning System) すなわち全地球測位システムの問題があり、カーナビの停止や誤作動などで騒がれたが、GPSの場合は原因が明確に把握されていて発生する現象が予測でき、対策についても方法がわかっていたので大きな問題にならなかった。また、本年9月9日が1999年9月9日ということで9が並んでコンピュータの誤作動の心配があるとの無知にして無責任な一部マスコミの警告があったが、これは全くナンセンスであった。

これらと比較すると2000年問題はとても複雑で、心配の種がどこにあるのかは明確に判明しているが、それがどの範囲にどれだけの影響を与えるかが読めず、それに対する事前の対策がどこまで有効なのかが見えないのである。一言でいって万全の対策が不可能なのである。

心配の種は、西暦年号を下の2桁で表現する事に起因している。昔はコンピュータの記憶装置が小容量であり高価であったからと説明しているが、自分で深く考えることなく他人の話を受売りをする人が多いものだなと思える。この説明が間違っているとは言わない、ただ、これで説明が尽くされているという態度が軽薄なのである。過去においてOA (Office Automation) が騒がれた頃に、多くの専門家と称する人達が、SRI (Stanford Research Institute) の調査分析の結果としてFortune誌が発表したデータ的な内容を錦の御旗よろしくかけてOAを推進すべき理由としたのを思い出すが、2000年問題がここまで騒がれる原因を記憶装置の話だけで済ませられるものではない。ISO (国際標準化機構) やJIS (日本工業規格) の規格問題、コンピュータシステムの資産継承の問題、さらにはシステム開発・ソフト開発の手法とメンテナンスの問題等を多角的に考察しなければ2000年問題の正体は見えてこないし、それに対する方策もつかめるものではなく、高度情報化時代のネットワーク環境ゆえのインターフェイスの整合性などを抜きにして論じられるものではない。

さらには、もはや技術的な議論だけでは不十分で、高度情報化社会の社会現象的考察も必要である。多角的な深い分析の結果として2000年問題に対する万全の対応なるものが存在しないことが判った今として、放

置できないトラブルが発生した場合に、それに連動する形でどのような現象が生起するのかの予測は困難であり、どれぐらいの期間と、どれぐらいの経費が情報システムの正常化に必要なかの予測も困難であり、簡単に言えばお手あげなのである。

ここで肝要なのは「遅れず慌てず」の心掛けであろう。慌てないとなると「果報は寝て待て」ということになりそうだが、手を拱いて待っているのは「阿呆は寝て待つ」ということになり、ここで大切なことは「人事を尽くして天命を待つ」であろう。これがあって初めて「果報は寝て待て」が生きてくる。2000年問題についても、思いつく手だては全て打っておいて、それでも発生した事象に対して精力的に取り組むより仕方がないということである。他方では、2000年問題はシステム開発やソフト開発を根元的に見直す絶好の機会と考えられる。経験と勘で職人的にそれらを続行する限りでは、今後いろいろな困った問題に遭遇する可能性がある。「言うは易く行うは難し」ではあるが、システム開発やソフト開発を文字通りにシステムティックに実施しなければならぬのではなからうか。現象を表面的にとらえて反応し騒ぎ立てる姿勢も反省すべきである。前世紀にケンブリッジ大学のパベッジ教授が提案した郵便料金地域内均一制のように、一見馬鹿気た提案が世界中の人達に恩恵を施していることや、フロンティアの発明のように一見世界の救世主よろしき発明が今では世界を泣かせている事実を見るにつけ、軽率に現象に反応するだけでは情けないと言わざるを得ない。

最後に一言、もしも人間ならば00年を1900年とはよもや解釈するまい、2000年と自然に解釈すると思う。コンピュータが00年を1900年と解釈する事による2000年問題は、改めてコンピュータとはそれだけの物に過ぎないと思う。これとてもフォンノイマン型のコンピュータなればこそ00年を2000年とコンピュータに解釈させることもできたはずだと考えると人間も気のつかないものだなと感じ、人間の弱点の1つを見る思いである。 (みやの たかあき 経営学部教員)

## 終りと始め

杉本 明

一つのことを始めると、その終りが何時か来る。ヒト、デキゴト、これらのものを一つの個として考えると、始まった個は必ず終わるのである。しかし真実かどうかは別として、我々は無限の連続である時間の中にいると思っているので、個は終わるもの、有限であるとしても、同様の別の個がまた始まる、と意識して

いる。そして互いに発生がずれた個がさらに同一時間を共有しているので、有限である無数の個が捻れ合い縋り合っている連続の縄、あるいは銀河の宇宙の中に我々はいる、と信じている。この信念が正しいのか錯覚なのかはここでは問うまい、その判定の基準たる絶対がそもそも絶対的に疑わしい、と相対的な我々は甲斐のない愚見にすがっているからだ。もっと肩の力を抜いて気楽に考えてみる。

一つの個が終り、同様の個がまた始まる、その典型的な例は一年という有限単位の非連続的連続であろう。古い一年が終り、新しい一年が始まる。新年の最初、一月は英語では"January"というが、「ヤヌスの月」の意であることは良く知られるところである。ヤヌスは前向きと後向きの二つの顔を持つ、玄関や戸口の神で、曆から考えると旧年と新年の両方に顔を向けていることになる、いわばこの神は有限として切り取られた一年を数珠のように扱い、それを連続して繋いでいく役をしているのだ。我々はこうして一つのものにそれなりのけりをつけ、その処理を済ませたつもりで、新しい一つに関わってゆく、それでいて、連続に手を貸している、あるいは連続的に存在している己れを確信しながら、なお、ヤヌスという代役の神を作って、それともそんな神になりすまして、ひょっとして交流的かもしれない人生を直流的に過ごしているのである。

いや、もっと肩の力を抜いてみようじゃないですか、なんだかんだってって、20世紀はもうおしまい、21世紀の始まりなんですからね。ところが、ところがです、2000年問題といったって、コンピューターの仕組みは知りません、テレビがなぜ映るのかよく知らないまま見えています、21世紀の世界の行く末とくれば、専門家だって分かるもんですか、と考えて陰でほっとしています。まあ二つの世紀に跨がって人生を体験できるのは一つの感慨ではありますが、一つの世紀の中だけで生きたという体験とどっちが偉いかとなると、悔しいが「？」ですね。でも、ごく普通に考えてみると、今の我々は過去を埋め立てた？何層もの地盤の上にたっております。ずっとずっと気の遠くなる程先の未来では、この時間連続があるとして、我々のこの時も、化石層の一部なのかも知れません。まあ未来なんてものは今を中心とした仮想なんです、過去だって、仮想かどうかはともかく、今を中心とした集積点に、要不要に関わりなく、でも多分、要の方だから、有無を言わず積み重ねてあるものなんです。過去だ未来だと言ったって、みんな我々が今現時点から計ってそれで決めている、その意味で我々は随分偉くもあり、我侖であり、仕様の無いものなんです。過去、現在、未来をすこし視点を変えて見てみましょうか。ある種の人たちにとっては、どうも賛成できる見方とは言いかねますが、過去はマイナス、ネガティブ、否定的なもの、未来はプラス、ポジティブ、肯定的世界と

なる場合があります。すると現在はゼロ、あるいはニュートラルと書いていいんですね、ゼロかニュートラル。ゼロは何も無し、と大抵の人は思っている。現在はゼロ、何も無し、ですか？ 固いこと言いつこなしたよこれでいいの、ま、そうしましょう。そういう冷静ひねくれも、あればそれはそれで面白い。但し、一方、ひねくれなきや、はて、べつにひねくれなくたって、未来もゼロ、白紙で何も無し。当たり前前の謙虚さというところですか、それにしても、ゼロって本当に何も無しですか、ニュートラルはどうなりますか？ 一寸、数列を、いや、何でと言われても困りますが、二次関数のグラフを考えてみて下さい。x軸とy軸の交点は大本のゼロ、これはニュートラルとは言えますが、何も無し、とは言えないでしょう。ゼロは大袈裟に言えばグラフの中心、起点ですよ。数学の理論、概念は分かりません、意識の数学となると、ますます「不思議の国」の論理学、われわれはアリスみたいに感嘆するのみです。ただアリスのように、自分をどこまでも不動のゼロ起点において頑張るしかありません。それが幸か不幸か、アリスには決められない、今の我々もアリスの幸不幸を決めかねている、それでも動くものは動いて、流れは流れて、繋がれた舟、ゆく舟、どちらが可とも言えるわけがない。

何でアリス？アリスはどうなったの？と今はきかないで下さいね、ええと、ともかく、左様、どうやら我々は否応なく起点たる現在におります、終りと始めに挟まれて、その終りと始めも実はよく分からない、この自分にしてからが、物理的生物学的な誕生と死は別として、ひょっとして始めもなく終りもない、現在という浮き世に足をひたしているのが浮かんでいるのか、そんな曖昧でありながら、やっぱり経験論的には実在しております。この認識を糧にして、とりあえず、なんてこと言わないで、しっかり生きて、考えて、少しの楽しみも得て、苦勞を重ねるしか仕方ないのです。いっそ、始めとか終りとか、それがどうしたってエんだ、なんかいいことでもアンのかよ、と居直ってみたい気も、時に少し、実はしょっちゅう、なんです、やっぱり始めと終りって、大事は大事なんですよ。どこが大事？何が大事？と、仰せられても、さあそれも分かりません、分からぬままに「終わって」しまおうでしょうか、どうなんでしょう。

20世紀から21世紀へ移るにあたってなんか書け、と言われて引き受けたものの、恙無き移行どころか、まずともかくどこかに踏み止まって頑張ることがどんなに難しいものか、改めて分かったという次第。始めもなく、終りもない、主張にも欠ける繰り返、何方様もまっ平ご免、ごかんべん下さりませ、と段々の尻すばみ、アリスの不安はよそにして、ロウソクのように消えることにいたします。

(すぎもと あきら 英語教育研究センター教員)

#### ☛ SD21 サービス開始

情報サービス課では、Science Direct21のサービスを始めました。エルゼビア社とその関連会社発行の約 1200 タイトルの雑誌（英文）をインターネットで提供するものです。図書館ホームページの「電子ジャーナル・新聞」からお入りください。

自然科学から人文・社会科学まで、広い分野の雑誌が用意されています。

学内のパソコンで、24 時間検索OK です。

自然語で、論文検索ができます。

本学購読誌は無制限に本文を開くことができます。

Group login からお入りください。

Personal login は教員の皆さん向けのメニューです。これを使っていただくためのトレーニング会は次のように開催いたします。

1999 年 10 月 13 日 午後 2 時から（90 分くらい）

場所：中央図書館 1 階図書館ホール

参加ご希望の方は、情報サービス課参考係まで。

e-mail: [lib-ref@star.kyoto-su.ac.jp](mailto:lib-ref@star.kyoto-su.ac.jp)

tel (直通) 075-705-1470

tel (内線) 2245

#### ☛ もうお使いですか？ 朝日新聞DNA

1985 年から今朝までの朝日新聞の記事が一気に探せる DNA は、トライアル期間も終わり、正式なサービスを始めました。

学内のパソコンで、どこからでもアクセスでき、24 時間使えます。同時アクセス 10 台まで。

特に、政治・社会面は今朝の記事まで OK です。（スポーツなどは 1 日程度遅れるようですが）

図書館ホームページの「電子ジャーナル・新聞」から入って、どうぞご活用ください。

#### ☛ MLA Modern Language Association データベース再開

一時使えなくなっていた M L A（言語・文学関係データベース）が使えるようになりました。

利用ご希望の方は図書館 3 階レファレンスカウンターにお申し出ください。Tel・e-mail 何でもお受けします。上記のアドレス・ナンバーにどうぞ。

#### ☛ 学術情報センター電子図書館サービス

学術情報センターも電子ジャーナルサービスをしています。

主として学会誌を、約 170 タイトル読むことができ、利用可能なジャーナルリストもご覧になれます。

タイトル数も少しずつ増えており、近々には、英国物理学会の刊行雑誌も予定されています。

教員の皆さんは、個別に直接の申込みができます。

参考係までどうぞ。

#### ☛ 日曜・祝日開館のお知らせ

後期定期試験に備え、12 月 5 日～2 月 13 日の日曜・祝日は開館します。ただし、年末・年始（12 月 25 日～1 月 6 日）及び入学試験期間中（2 月 5 日～8 日、10 日）は閉館します。

#### ☛ 冬期休暇貸出

12 月 21 日～1 月 7 日は冬期休業期間となります。

それに伴い、冬期休暇貸出を開始します。

普通図書：12 月 7 日（火）～

指定図書：12 月 14 日（火）～

返却期限日：平成 12 年 1 月 14 日（金）

#### ☛ 返却期限日を守ってください

このところ返却期限日を守らない人が目立っています。1 つの資料に利用が集中することも多く、予約が重なっている中で期限オーバーになると、その資料が帰ってくるのを待っている人に大変な迷惑がかかります。

期限内なら、予約が入っていなければ貸出延長もできますので、よろしくご協力ください。

#### ☛ 教員文庫の募集について

図書館では、先生方の著作物（共著・訳・編集・監修等を含む）の寄贈を受けて、教員文庫と名づけて、収集しております。先生方の著作で、すでに出版されたもの、これから出版されるものがありましたら、ご寄贈をお願いします。

平成 11 年 9 月 20 日現在で、教員文庫には 472 冊所蔵されています。教員文庫で所蔵かどうかの確認は、本学ホームページの図書館のオンライン目録によってできます。検索画面の「運用」欄で「P 教員文庫」を選択し、検索すると全リストが、また著者名欄、書名欄を使って特定の図書の検索ができます。

お問い合わせ・寄贈先：管理課受入係（内線 2224）

2 冊ご寄贈ください。1 冊は教員文庫として保管し、もう 1 冊は学生用として閲覧室に配架し、貸出等の利用に供します。